

つとむさんの畑で いっしょに汗を

JAつくば市谷田部産直部会 沼尻 務さん(茨城県つくば市)

JAつくば市谷田部産直部会で、若手生産者を束ねるリーダー的存在の沼尻さん。沼尻さんの畑では6年ほど前から、野菜作りの担い手として、障がいのある人たちが働いています。見た目は少し厳つく(失礼!)、でも、やさしいハートの頼れるアニキの想いとは――。

すいかを食べて、もうひと仕事

「すいか、持ってきたぞ。遠慮すんな〜♪」
大きな包丁で、手際よく切り分ける沼尻さん。真っ赤に熟れたすいかは、見るからに甘そう。「冷え冷え〜」当たり前ですね!」

つくば市にある、沼尻さんのなすとねぎの畑。農作業の休憩時間に、すいかにパクつくのは、障がいのある5人の男性(20〜30代)です。皆さんNPO法人「つくばアグリチャレンジ」が主宰する「ごきげんファーム」のスタッフ。農業ヘルパーさんたちです。月曜から金曜の毎日、5人くらいでチームを組み、沼尻さんの畑で汗を流します。サポートするのは農業指導員の涼子さん。沼尻さんは「ごきげんファーム」の農業ヘルパー事業として、農作業を委託しています。



沼尻さん(左端)と「ごきげんファーム」のスタッフの皆さん。右から3人目が涼子さん。



すいかを食べて（取材班もいただきました!）、引き続き農作業。今日は、ねぎ畑の草取り。「種まき、苗の定植、草取り、収穫、あと片づけなど、作業内容はいろいろです。務さんは、いろいろな野菜を育てていらっしゃるの」（涼子さん）

沼尻さんは、なす、長芋、ねぎ、レタス、人参、ピーマンなど13〜14種の野菜を、化学合成農薬と化学肥料にできるだけ頼らずに育てています。除草剤も使わないため、草取りは欠かせません。人手不足で困っていたとき、生産者仲間の紹介で「ごきげんファーム」のことを知りました。「ごきげんファームのスタッフにお願いして、かれこれ6年かな。他の畑の仕事や出荷作業があるから、通りかかったときに『やってるか』と声をかけるくらい。信頼して任せています。初めて畑に来た子が、草と間違えてねぎを抜いたとか、小さい失敗はあるけどさ（笑）」（沼

尻さん）

見た目は少しヤンキー風ですが（失礼!!）、笑うとチャーミングな沼尻さん。

「いつもあたたく見守っていただき、ありがたいです。ただ、それに甘えちゃダメなんですよ。私たちは、仕事で来ているので。スタッフを乗せて車で走っているとき、畑で働く務さんを見かけると、『あ、つとむさんだ』とみんな喜ぶんですよ」（涼子さん）

「農作業は大変だけど、『嫌だ、嫌だ』とは思ってほしくないし、できれば『楽しい』と感じてほしい。近所のおじいちゃん、おばあちゃんを通りかかったとき、『こんにちわ』とあいさつしたら、ご近所さんも気持ちいいでしょ。沼尻さんのところの若い子、元気いいなあ」という声もちらほら耳に入ります。そういう雰囲気は、仕事を楽しめないと、生まれてこないからさ」（沼尻さん）

NPO 法人 つくばアグリチャレンジ 「ごきげんファーム」

無農薬野菜・お米の栽培、体験農園、竹林整備のほか、沼尻さんのような地域農家のお手伝いなどを行っている、就労継続支援B型とA型の事業所。2011年4月、1.6ヘクタールの畑を借りて、8名の障がいのあるスタッフと事業開始。現在は、地域の耕作放棄地などを使い、年間100品種以上の野菜を栽培。さまざまな障がいのある80名以上のスタッフが働いています。

webサイトはこちらです!

<https://gokigenfarm.com/>

JAつくば市谷田部産直部会

パルシステムではおなじみの野菜の産直産地。約70名の生産者が、化学合成農薬や化学肥料を減らした環境保全型農業を实践。野菜の全生産者が県の「エコファーマー」認証を取得するなど、積極的な取り組みが評価され、「全国環境保全型農業推進コンクール」で優秀賞を受賞。次世代を担う若手生産者も数多く活躍しています。沼尻さんをはじめ、同部会の皆さんは2013年6月号「農家レストラン」をあそぼう!?!にご登場。

facebookページ
見てみてね!

<https://www.facebook.com/yatabesanchoku/?fref=ts>

互いを認め合う関係

黙々と草取りに汗を流す男性に、「仕事、どう？」と訊くと、「土で汚れるのは苦手だけど、土をさわると気持ちいいよね」。そうつぶやくと、また黙って草取りを続けます。

「指導員としてこの畑に来るようになって、1年半ほどです。最初のころはチームワークもバラバラで、畑のなかでずっと携帯電話をいじっている子もいました。それを思うと、みんなすぐ変わりました。就農を目ざして、がんばっているスタッフもいます。最近はずいぶん、私のほうが怒られているんです。今日も手袋を忘れて、『もう、何やってんだよ！』って(笑)。(涼子さん)

「農作業が得意な子、不得意な子、当然あるよ。でも、そういう分け方はしたくない。『今日は、作業がむずかしいな』の収穫だから、できる子だけでいい」と頼むと、せっかくなの畑に来たいと思っている子が傷つくよね。作業効率が上がっても、理念というか、想いが崩れてしまう気がする(沼尻さん)

「ごきげんファームの皆さんが草取りに精を出すかたわら、畑の外でぼつんと、物思いにふける男性がいました。

「彼は、種を撒いたり、苗を定植したり、収穫作業のときは、すごくいい仕事をするんです。絵を描くのがとても上手で、何事にもていねいに向き合うタイプ。鎌でざっくり草を刈るよう

なことが、得意じゃないんです。以前は『あいつ、なんで仕事をやらないんだ』みたいな周りの声もありました。それがチームワークもできてきて、『他の作業でがんばるから、いいか』みたいに、互いを認め合う関係ができてきましたね(涼子さん)

涼子さんは、その男性に寄り添い、「いつしよにやろう」と肩をたたき、畑に誘いました。

「障がい者から学ぶこと？とくにないなあ。自然な付き合いですよ。誰がどんな障がいで、どんな病気か、そんなことは気にしない。もう6年、うちの畑で同じことを続けている。それでいいんじゃないかな。オレも、みんなも、いつしよに成長している気がするし」(沼尻さん)

子どものそばにいたかった

沼尻さんが、実家を継いで、就農したのは16年前。28歳のときでした。

「厨房機器を扱う会社でバリバリ働いていた。家に帰れない日も多かったけど、仕事は楽しかったよ。農業には興味なくて、継ぐ気はまったくなかったな(沼尻さん)

就農のきっかけは、生まれたばかりの長男・元哉さんに、重い脳の障がいがあったからです。「子どものそばにいたかったからね。でも、親父には反対された。作付けも縮小していたし。3回くらい頼んだかな。やらせてほしいって(同)



就農後の沼尻さんは率先して、いろいろな作物や品種を育てたり、農薬や化学肥料にできるだけ頼らない農業を実践したり、収穫した人参をジュースにするなどの商品開発に取り組めます。今では、JAつくば市谷田部産直部会の若手生産者を束ねる立場にいます。

「息子は今18歳、車いすで要介護の生活です。『ごきげんファーム』のスタッフに畑を任せようと思ったのは、長男のことも正直あった。障がい者福祉に携わる人たちとのつながりも生まれるから。親父も口には出さないけど、いろいろ思うことがあったはず。『こういうことをやりたい』と話したとき、反対しなかったの(同)「自己満足かな。でも」沼尻さんは続けます。「ずっと農業ができるのかどうか、不安だよ。息子のこと、どうなるかわからない。ただ、こうして障がいのある人に働いてもらっているのは、やってよかったと思ってる。みんなも嫌がっていないみたいだしね。ゆるやかに続けられたらいいな」

午前中の農作業を終えようとしたとき、スマホを手にしたひとりのスタッフが、『のんびる』取材班に、遠慮がちに声をかけました。「撮っていいですか?」撮って、撮って。写真撮るの、好き?「微笑でうなづく彼。沼尻さんもいっしょに」と誘うと、「オレも?」とうれし恥ずかしそう。せっかくなので記念撮影(4ページ写真)しました。



「みんな一所懸命、畑と向きあっています。そのことを沼尻さんに知ってもらいたいし、私も伝えたい。そして、この場を守ってくれている沼尻さんの想いも、スタッフのみんなに伝えたいです」(涼子さん)

「ごきげんファームの皆さんとは、ここで別れ。午後は別のスタッフがチームを組み、畑にやってきます。『またな』と手をふって車を見送る沼尻さん。賑やかな畑が、急に寂しくなりました。」

「農作業の邪魔をしたら悪いし、いつも遠慮して畑に入らないんだ。ふだんはいっしょに話す機会もないから、今日は楽しかったよ。さ、午後はオレもがんばろ!!」(沼尻さん)

沼尻さん一家です♪

